

子供を持つ既婚女性の母性・女性性(Ⅰ) : 母性・女性性測定尺度の構成

著者	大西 久男, 原田 和幸, 立山 清美, 加藤 雅子, 内藤 泰男, 田中 梅野, 中塚 善次郎
引用	Journal of rehabilitation and health sciences. 2003, 1, p.42-48
URL	http://doi.org/10.24729/00005807

報告

子供を持つ既婚女性の母性・女性性 (I) 母性・女性性測定尺度の構成

大西久男¹, 原田和幸², 立山清美¹, 加藤雅子³, 内藤泰男³, 田中梅野⁴, 中塚善次郎⁴

¹大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部, ²田園調布学園大学人間福祉学部,

³大阪府立看護大学医療技術短期大学部, ⁴鳴門教育大学障害児教育講座

受付: 2003年10月9日, 受理: 2003年12月11日

Married Women with Children and Their Maternity-Femininity (I): Construction of Maternity-Femininity Scales

Hisao OHNISHI¹, Kazuyuki HARADA², Kiyomi TATEYAMA¹, Masako KATO³, Yasuo NAITO³, Umeno TANAKA⁴, and Zenjiro NAKATSUKA⁴

¹Osaka Prefecture College of Nursing, ²Denen-Chofu-Gakuen University, ³Osaka Prefecture College of Health Sciences and ⁴Naruto University of Education

Received October 9, 2003; accepted December 11, 2003

Key words: 既婚女性; 母性; 女性性; 尺度構成

序 論

子供を持つ既婚女性には、女性としての役割、母親としての役割、妻としての役割、職業人としての役割などいくつかの役割が同時に求められている。このことは既婚男性にも同様に当てはまるのではあるが、近年、「男は外で仕事、女は家庭で家事・育児」のステレオタイプな「女性像」から脱却し、新たな女性像についての研究が多くなされてきている。いわゆる「性差研究」の領域であり、「性役割」についての研究である¹⁻⁵。性役割研究の領域では、生物学的性 (sex) と心理社会的性 (gender) が、個別にあるいは相互に研究されてきた。旧来のステレオタイプの女性像は、文化的背景による違いはあったが、生物学的性により心理社会的性が規定されたものであった。しかしながら、近年では、必ずしも、両者は一義的に規定されるものではなくなっている。個人の持つ意識や価値観が多様になってきたためであろう。この多様化と家庭での養育機能の低下とが直接関係があるのかは今後の研究を待たねばならないが、子供を持つ既婚女性が自分の「役割」をどのように考えているのかを知る

必要はある。筆者らは、今回、リハビリテーションや教育に関わる立場から、障害を持つ子供の母親へのより効果的な介入・支援のために、子供を持つ既婚女性の家事、育児および仕事に対する意識を中心として、まず全体像を把握する必要があると考えた。換言すれば、「障害を持つ子供の養育は、一般の子供の養育よりもより高い家庭の養育機能が求められる」はずであるが、「一般の家庭の養育機能でさえ変化してきている」時代において、現在の家庭の、とりわけ従来からいわれている、主たる養育者(であろう)母親の意識を改めて把握する必要があると考えた。

家事や出産・育児に対する意識(一般に、前者が「女性性」、後者が「母性」と呼ばれる事が多い)については、これまでも多くの研究がなされてきているが、記述的なものが多く、意義深いものではあるが、筆者たちのような発達障害のリハビリテーションに関わる立場の者には、特別な訓練がなくても実施できる客観的な評価法、すなわち「質問紙」が必要と考える。近年、詳細な記述研究をもとに、測定尺度を構成しようとする動向が認められるが、「仕事に対して」²、「出産・育児に対して」^{3,5}、「家事に対して」⁴などのように、個別の領域に焦点を当てたものがほとんどである。

[†]連絡著者 E-mail: ohnishi@osaka-hsu.ac.jp

本研究の目的は、子供を持つ既婚女性の子供に対する意識、夫に対する意識、仕事に対する意識を、客観的かつ包括的に測定するための測定尺度を開発・構成することである。

方 法

質問紙の作成：本研究で用いた項目は、大日向⁹の詳細な記述的研究で明らかにされたものを中心に項目化した。項目作成の基準は①母親役割の肯定と否定、②子供に対する感情(母親が子供を自分自身のどこに位置づけ、いかなる距離感を持って接しているか)、③子供に対する精神的関係性、④夫に対する関係性、⑤女性として、一人の人間としてどれだけ確立しているか、の5つのカテゴリーであった。包括的な尺度を作成する目的から、それぞれのカテゴリー内で19項目、27項目、31項目、41項目、20項目の下位項目が作成された。最終的に138項目をランダムに並べ、質問紙が作成された。各項目は、「その通りである」、「どちらかといえばそうである」、「どちらかといえば違う」、「全く違う」の4件法による評価が求められた。また、対象者の属性(居住地域、本人の年齢、本人の学歴、本人の就業の有無とその形態、夫の年齢、夫の学歴、子供の人数、子供の性別と年齢、子供の通う学校)について問う項目をフェース・シートとして加えた。

対象：調査は「A育児研究会」に参加している子供を持つ既婚女性が対象である。研究会の際に地域ごとの世話役をしている女性に調査の主旨を伝え、後日、その世話役に依頼文、調査用紙および返信用封筒をセットにしたものをまとめて送付し、地域ごとの研修会・勉強会の参加者に個別に配付してもらった。世話役の居住地は千葉県、東京都、京都府、香川県、徳島県、高知県、愛媛県、福岡県、宮崎県、沖縄県であり、配付された質問紙は1047部であった。なお、回収は基本的に個別に郵送により行われた。

結 果

分析対象

1047部の発送・配付のうち630部が返送・回収された。回収率は60.2%であったが、多数の記入漏れや返送が極端に遅れた者は除外した。また、独身者も今回の分析からは除外した。最終的に分析対象になったのは399名分(38.1%)であった。属性による特徴については、Table 1-aからTable 1-eに示す通りである。

質問紙の因子分析

138項目の回答について、「その通りである」、「どちらかといえばそうである」、「どちらかといえば違う」、「全く違う」のそれぞれを、1~4点と得点化した。138項目の項目間の相関行列を求め、主因子法で因子分析を行った。なお、共通性の推定値は重相関係数の2乗(SMC)を用いた。その結果、87個の固有値(1.0以上のもの)と固有ベクトルが得られたが、固有値のプロット(スクリー法)から因子数を4と定め、バリマックス回転を行った。因子ごとの負荷量と内容妥当性を考慮し、かつ信頼性の下限を示す α 係数が高くなるように項目を取捨選択した。

4つの因子は、「I 相互依存(因子)」、「II 夫婦関係(因子)」、「III 母性(因子)」、「IV 社会進出(因子)」と命名された。より多くの尺度を得るために、さらに、上記の尺度構成の手順で、因子内での下位分類(因子分析)を行った。この時、それぞれの下位尺度に含まれる項目は10項目ずつになるようにも考慮した。その結果、「I 相互依存(因子)」は「1子供からの愛情欲求」、「2子供との同体感」、「3子供への統制的態度」、「4夫からの愛情欲求」の4尺

Table 1 対象者の属性

a 年齢			c 居住地	
	妻	夫		
20歳代	32	11	関東	71
30歳代	165	118	近畿	11
40歳代	162	205	四国	237
50歳代	31	44	九州	75
60歳代	7	16	不明	5
不明	2	2	合計	397
合計	399	399		

b 学歴			d 就業形態	
	妻	夫		
中学卒	12	22	無職(主婦)	192
高校卒	146	126	家業手伝い	33
短大卒	79	13	内職	9
専門学校卒	53	27	パート	57
大学卒以上	105	204	常勤	94
不明	4	7	不明	14
合計	399	399	合計	399

e 子供の数	
1人	73
2人	218
3人	91
4人以上	16
不明	1
合計	399

Table 2 各尺度を構成する項目及び諸統計量

第I因子：相互依存

1 子供からの愛情欲求尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	6 子供がそばにいと安心する	0.448
2	9 子供を生きる張り合いとしたい	0.518
3	14 子供は私の味方であってほしい	0.515
4	34 私がいないと困ると子供に思われたい	0.626
5	35 子供には、離婚・夫と死別になっても私と一緒に暮らせると信じてほしい	0.553
6	47 いつまでもあどけなく子供っぽくいて欲しい	0.503
7	62 私がいないと寂しいと子供に思われたい	0.627
8	73 子供のことで先生にほめられるのは最高に嬉しい	0.401
9	110 私の幸せは子供次第である	0.569
10	129 子供の出世は私の出世である	0.488
因子寄与：2.800 0.396 0.303 0.149		α係数：0.792

2 子供との同体感尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	26 子供のためならどんなことでもするつもりである	0.488
2	28 子供がいじめられたらまるで自分のことのように思う	0.538
3	32 子供が病気で家で寝ているのに仕事にでかけなければならない女性を気の毒に思う	0.441
4	67 子供は自分の体の一部のように思う	0.592
5	92 子供の離儀は自分が代わるものなら代わってやりたいと思う	0.549
6	99 子供が母乳み子の頃の方が手が掛かるが、母親としては張りがある	0.422
7	106 もしも仕事でPTAなどに出席できないことがあると子供に済まないと思う	0.460
8	111 子供が赤ちゃんだった頃がたまらなく懐かしいことである	0.533
9	113 子供が親元を離れていくことは親としては寂しいことである	0.458
10	131 母親として振舞っている時が一番自分らしいと思う	0.507
因子寄与：2.514 0.434 0.103 0.085		α係数：0.768

3 子供への統制的態度尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	22 子供の進学・就職・結婚には具体的な夢をもっている	0.323
2	44 母親の私が一番よいと思う教育を子供に与えたい	0.477
3	49 子供には私の気持ちを理解してほしい	0.582
4	51 私が病気の時に子供に心配してほしい	0.485
5	53 子供の一日の行動を知っていたい	0.636
6	54 自分の関心が子供にばかり向いて視野が狭くなる	0.348
7	69 子供が他の人に自慢できる母親でありたい	0.544
8	93 子供が成長したら息子は父親を、娘は母親を乗り越える人物になって欲しい	0.325
9	124 母親であるために自分の行動がかなり制限されている(いた)	0.321
10	138 子供を見ているとまだ危なっかしくて自分がそばにいてやらねばと思う	0.397
因子寄与：2.099 0.373 0.186 0.119		α係数：0.709

4 夫からの愛情欲求尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	10 私の幸せは夫次第である	0.507
2	17 夫の一日の行動を知っていたい	0.590
3	36 夫の出世は私の出世である	0.359
4	48 私がいないと困ると夫に言われたい	0.645
5	66 夫からきれいだと言われたい	0.498
6	81 夫を生きる張り合いとしたい	0.485
7	89 私が病気の時夫に心配してほしい	0.564
8	115 私がいないと寂しいと夫に思われたい	0.770
9	119 夫は私の気持ちを理解してほしい	0.428
10	132 夫が出張した時には私にもお土産を買ってきて欲しい	0.460
因子寄与：2.940 0.649 0.070 0.003		α係数：0.791

第II因子：夫婦関係

5 夫との時空間共有尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	1 夫と一緒にいると楽しい	0.721
2	2 子供のことがなければ、たとえ海外赴任でもついていきたい	0.520
3	7 いつまでも夫と暮らしたい	0.741
4	21 朝目覚めた時、夫がそばにいてくれると有難いと思う	0.686
5	45 単身赴任はしてほしくない	0.601
6	57 夫の身の回りの世話が楽しい	0.539
7	58 つきあいでお酒を飲むことが重なる夫の健康が気になる	0.464
8	74 生まれ変わってもまた夫と結婚したい	0.701
9	96 夫がそばにいてくれると安心する	0.697
10	137 夫が我が家で夕食を一緒に食べてくれる日は嬉しくてついでに馳走を作ってしまう	0.499
因子寄与：3.902 0.249 0.189 0.093		α係数：0.857

6 夫との精神的…体感尺度

No (No)	項 目	因子負荷量
1	24 夫は私の相談相手であってほしい	0.661
2	29 子供が成長して家を離れたら夫とフルムーンの旅行をしたい	0.651
3	40 夫の心の支えでありたい	0.682
4	43 夫と共通の目標をもっていたい	0.601
5	55 夫が考えていることを知っていたい	0.522
6	77 たまには夫と二人でゆったりしたムードのレストランに出かけたい	0.556
7	82 いつまでも夫を信じていたい	0.650
8	94 夫の相談相手になりたい	0.725
9	100 夫は私の味方であってほしい	0.619
10	102 夫と共通の話題をもっていたい	0.711
因子寄与：4.106 0.304 0.248 0.059		α係数：0.866

7 自己中心性尺度

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	11	「亭主達者で留守がいい」という言葉は私にぴったりの言葉だ		0.560
2	13	夫の給料が少ないのがふがいなくしょうがない		0.506
3	39	家で子供が待っていると思っても、他の人に誘われたらつい喫茶店等に行ってお喋りしてしまう		0.311
4	46	夫が釣りや朝早く出かける時でも起きて朝食の用意をするのが苦にならない〔*〕		0.342
5	50	休日に夫が家でゴロゴロしていると目ざわりだ		0.496
6	60	働き者の夫をもって幸せだ〔*〕		0.346
7	72	子供にお金がかかり、そのために自分の物が買えないのが不満である		0.436
8	85	夫の食事の好みがあるさいのが面倒だ		0.365
9	88	ハウスクリーニングなどの主婦代行サービスをどんどん利用したい		0.277
10	126	いずれは夫と離婚するつもりである		0.412
因子寄与: 1.717 0.347 0.188 0.129				α係数: 0.659

第III因子: 母性

8 母親としての充実感尺度

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	5	子供を持ってみると女性に生まれてよかったと思う		0.657
2	8	母親であることが好きである		0.756
3	15	元気な子供の姿を見ていると私まで元気が出てくる		0.385
4	37	母親であることに充実感を感じる		0.716
5	38	疲れて帰宅した時、子供の顔を見るとほっとして元気が出る		0.556
6	41	子供を産まない方がよかった〔*〕		0.533
7	65	夜に子供の寝顔を見ているとしみじみと母親であることの幸せを思う		0.564
8	118	経済や住宅事情など環境が許すならもっと子供を産みたい		0.340
9	121	母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた		0.489
10	123	母親であることに生きがいを感じている		0.714
因子寄与: 3.440 0.295 0.269 0.105				α係数: 0.816

9 子供との精神的距離尺度

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	56	子供と一緒にいると楽しい		0.540
2	63	いつでも子供を信じていたい		0.499
3	68	子供と共通の話題をもっていたい		0.595
4	79	子供と一緒に外出したい		0.489
5	90	年をとったら子供や孫と一緒に暮らしたい		0.432
6	97	いつまでも子供と暮らしたい		0.457
7	103	子供の相談相手になりたい		0.664
8	105	夕食の時などに子供の話を聞くのが楽しみである		0.586
9	107	子供の心の支えでありたい		0.649
10	128	子供の考えていることを知っていたい		0.558
因子寄与: 3.045 0.312 0.247 0.143				α係数: 0.788

10 子供への献身性尺度

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	4	子供のためならたいのことは我慢できる		0.397
2	35	子供の身の回りの世話が楽しい		0.425
3	75	子供には母親の手作りのものを食べさせたい		0.411
4	78	子供の友達が我が家に遊びに来るとにぎやかになってうれしい		0.509
5	83	子供のために自分が何をしてくれるか考えるのは楽しい		0.542
6	87	子供を育てることを負担に感じる〔*〕		0.334
7	101	親の期待や感念にとらわれずのびのびした人生を子供には送らせたい		0.332
8	117	自分の子よりも小さな子供を見かけると昔を思い出して思わず微笑んでしまう		0.359
9	120	自分が外出する時は子供の食事の用意をして出かけるべきだ(だった)		0.416
10	127	子供が朝学校に出かける時は何があっても笑顔で送り出している		0.394
因子寄与: 1.738 0.365 0.170 0.031				α係数: 0.672

第IV因子: 社会進出

11 仕事追求尺度における項目

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	3	経済力のある女性が羨ましい		0.396
2	25	外国のキャリアウーマンが家事を夫と分担しているのを見聞きして、夫にも同じようにしてほしいと思う		0.454
3	27	自分に娘がいたら一生の仕事を身につけさせたい		0.361
4	30	我が家に私のかわりに主婦がいてくれたら私は絶対に社会で活躍している(いた)だろう		0.573
5	52	子どもに手が掛からなくなったら、これをやりたいという具体的な計画がある(あった)		0.337
6	59	子どもと一緒にいるより、職場で仕事をしている方が生き生きできると思う		0.550
7	91	家の中ばかりにいると自分にカビがはえてきそうだとまらない		0.435
8	109	家の中の空気より職場の空気の方が自分にあっているのではないかと思う		0.474
9	116	外国映画などできびきび仕事をしている女性を見ると“カッコいい”と思う		0.371
10	130	夫が定年退職したら夫の世話よりも自分の生き甲斐を追求してみたい		0.445
因子寄与: 1.987 0.352 0.144 0.089				α係数: 0.709

12 自立志向性尺度

No	(No)	項	目	因子負荷量
1	19	育児の真っ最中でも、新聞や雑誌をよく読んで、世の中の動きはわかっている方だ(だった)		0.376
2	42	一日中何もしないで図書館にこもって勉強したいと思うことがある		0.383
3	64	家族の一員として、子供にも家事を分担させるべきだ		0.398
4	80	どんな環境にいる時でも、私は好奇心を失わない		0.559
5	84	自分をのばすチャンスがあれば、積極的にのばす方だ		0.591
6	86	子供の悩みは、基本的には自分で解決していくものだ		0.443
7	98	森英恵(モリハナエ)や中村綾子のように、自分の仕事で光る人間になりたい		0.345
8	104	夫より経済力のある女性は生意気だと思う〔*〕		0.330
9	114	母親になったことで、人間的に成長できた		0.358
10	125	子供がどんどん成長して一人前になっていくことはうれしいことである		0.322
因子寄与: 1.763 0.378 0.225 0.095				α係数: 0.658

〔*〕を付記した項目は「逆転項目」である

度が構成された。同様に、「II 夫婦関係 (因子)」からは、「5 夫との時空間共有」, 「6 夫との精神的一体感」, 「7 自己中心性」の3尺度が、「III 母性 (因子)」からは、「8 母親としての充実感」, 「9 子供との精神的距離」, 「10 子供への献身性」の3尺度が、そして「IV 社会進出 (因子)」からは、「11 仕事追及」と「12 自立志向性」の2尺度が、それぞれ構成された。最終的には、既婚女性の母性と女性性に関する尺度として4因子12尺度 (各10項目) が抽出されたことになる (Table 2)。当初の138項目のうち、因子負荷量の低かった18項目はいずれの下位尺度においても採用されなかった。各尺度の α 係数は0.658~0.866であった。

さらに、12尺度の独立性を確認するために、対象者ご

とに構成された12尺度のそれぞれについて、項目の得点を合算したものを尺度ごとの得点 (尺度得点) とし、各尺度の平均値、標準偏差を算出した後、尺度間の相関行列を求め (Table 3)、主因子法による因子分析を行った (Table 4)。その結果、12の下位尺度は4つの上位因子への (再) 分類が可能であった。

考 察

本研究の目的は、子供を持つ既婚女性の子供に対する意識、夫に対する意識、仕事に対する意識を、客観的かつ包括的に測定するための測定尺度を開発・構成することであった。その結果、4因子・12尺度からなる測定尺度が構築された。統計量としてはおおむね信頼のおける

Table 3 尺度間相関行列

尺 度 名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 子供からの愛情欲求	1.000											
2 子供との同体感	0.730	1.000										
3 子供への統制的態度	0.684	0.662	1.000									
4 夫からの愛情欲求	0.611	0.513	0.556	1.000								
5 夫との時空間共有	0.183	0.162	0.189	0.562	1.000							
6 夫との精神的一体感	0.255	0.200	0.356	0.637	0.752	1.000						
7 自己中心性	0.106	0.070	0.106	-0.099	-0.541	-0.382	1.000					
8 母親としての充実感	0.298	0.302	0.233	0.302	0.411	0.345	-0.304	1.000				
9 子供との精神的距離	0.479	0.472	0.531	0.362	0.304	0.463	-0.219	0.462	1.000			
10 子供への献身性	0.315	0.369	0.253	0.232	0.303	0.259	0.327	0.629	0.561	1.000		
11 仕事追及	0.004	-0.011	0.174	0.020	-0.160	0.040	0.351	0.302	0.033	-0.007	1.000	
12 自立志向性	-0.209	-0.232	-0.058	-0.101	0.054	0.155	-0.060	0.143	0.129	0.214	0.460	1.000
平均値	24.140	22.937	21.361	23.060	19.025	17.083	31.153	17.960	17.594	17.882	22.035	18.822
標準偏差	5.274	5.099	4.336	5.454	5.674	5.338	4.192	4.798	4.064	3.588	4.762	3.977

Table 4 尺度得点での因子分析結果
(バリマックス回転後)

尺 度 名	F1	F2	F3	F4
I 「相互依存」因子				
1 子供からの愛情欲求	0.836	0.075	0.173	-0.087
2 子供との同体感	0.790	0.011	0.243	-0.125
3 子供への統制的態度	0.783	0.141	0.128	0.142
4 夫からの愛情欲求	0.624	0.574	0.031	-0.012
II 「夫婦関係」因子				
5 夫との時空間共有	0.081	0.821	0.260	-0.109
6 夫との精神的一体感	0.231	0.819	0.184	0.146
7 自己中心性	0.264	-0.476	-0.424	0.270
III 「母性」因子				
8 母親としての充実感	0.185	0.242	0.644	-0.004
9 子供との精神的距離	0.448	0.215	0.564	0.121
10 子供への献身性	0.203	0.115	0.764	0.064
IV 「社会進出」因子				
11 仕事追及	0.109	-0.088	-0.095	0.688
12 自立志向性	-0.234	0.089	0.241	0.622

結果が得られた。以下では、それぞれの因子(尺度)の特徴と今後の問題について述べる。

1 因子と尺度の特徴

第Ⅰ因子「相互依存」(4尺度)

「1 子供からの愛情欲求」では、「私がいなくて寂しいと子供に思われたい」と「私がいなくて困ると子供に思われたい」の2項目の因子負荷量をもっとも高く、尺度内での中心的項目であると考えられる。子供べったりで、子供に支えられていることの裏返しとして、子供に依存して欲しいと思っている。子供がそばにいると安心するということは換言すれば、子供がそばにいないと安心できない、離れていては不安で仕方がないことを意味するものであろう。自分がいなくて寂しくて困るということは、すなわち依存されることで自分の存在価値が認められ、自身の安心につながるのではないだろうか。また、夫とは離婚や死別という事態になっても、子供とは離れられないと思っている。子供が褒められることは自分が褒められることに等しく、子供が出世することは自分が出世するのと同義で、自らの幸せや満足、自らの努力によってではなく、子供に投影することで、満たそうとしているのではないであろうか。

「2 子供との同体感」の中心項目は、「子供が親元を離れていくことは、親として寂しい」と「子供が赤ちゃんだった頃がたまらなく懐かしい」である。この尺度では、自分の子供は自分がおなかを痛めて産んだものであり、まさに自己の分身で、ひとりの人格を持った他者であることが芯から納得できず、子離れができていない、あるいは一方的に愛情を注ぐことで自己満足をしている。

「3 子供への統制的態度」の中心項目は、「子供が他の人に自慢できる母親でありたい」と「子供の1日の行動を知っておきたい」であろう。この尺度は、まず子供への管理が明確である。すなわち、子供は危なっかしい存在であり、自分がそばについてやらねばならず、子供の1日の行動を把握し、よい教育を受けさせたいという期待も反映しているようである。進学・就職・結婚には母親としての身勝手な願望があると同時に、将来は親を乗り越えるような人になって欲しいとも思っている。母親としてのアンビバレントな心情を示す尺度といえるであろう。

「4 夫からの愛情欲求」の中心項目は、「私がいなくて寂しいと夫に思われたい」と「私がいなくて困ると夫に思われたい」の2項目である。先の「子供からの愛情欲求」と同様の枠組みが当てはまるであろう。すなわち、自己を夫に投影することで、自分自身の幸せや満足を得

ようとしていると考えられる。いい換えれば、自己確立のできた妻として、夫と対等で親密な信頼関係を求めるというよりも、夫に無条件に受け入れてもらいたいことを示している。

「第Ⅱ因子」(夫婦関係)(3尺度)

「5 夫との時空間共有」では、物理的距離を問題にしており、「生まれ変わってもまたこの夫と結婚したい」、「夫と一緒にいると楽しい」と「いつまでも夫と暮らしたい」が中心項目である。できるだけ一緒にいて、身の回りの世話をするのが楽しく、朝の目覚めも夕食も夫とともにしたいし、離れて暮らすのはいやで共同生活を望み、時間的空間的な共有を求めていることが伺える。夫を物理的に一緒にいるパートナーとして非常に気に入っており、この点で、上述した「夫からの愛情欲求」尺度とは質を異にしている。

「6 夫との精神的距離」は、相関の高い項目が多く、「いつまでも夫を信じていたい」と「夫の相談相手になりたい」が中心項目と考えられる。先の「物理的距離よりは、精神的な信頼感が中核となっている。夫を信じ、お互いに相談相手になりあい、支えあい、共通の話題と目標を持ち、時には2人だけの時間を持ち、子育てから開放された後にはゆっくりと旅行をするのを楽しみに・・・などの夫婦間のコミュニケーションの大切さを示す尺度といえよう。

「7 自己中心性」は、「休日に夫が家でゴロゴロしているとめざわりだ」と『亭主元気で留守がいい』ということばは私にぴったりの言葉だ』が中心項目であろう。これらは、自分の心の中に夫の存在感がなく、当然のことながら、夫に対する尊敬や信頼も見受けられない。さらに対象は子供に対しても同様で、子供に対する愛情もないことを示している。極端な表現をすれば、「悪妻愚母」を示す尺度といえよう。

「第Ⅲ因子」(母性)(3尺度)

「8 母親としての充実感」では、母親であることに生きがいを感じる」と「母親であることが好きである」が中心項目である。すなわち、母親であることが好きで、充実感と生きがいを感じており、気持ちも安定して落ち着いている。子供を持ち、女性に生まれてよかったと思う・・・など、母親になっているこの時点で子供によって自己の女性性を肯定することが可能になっている。すなわち、子供を授かり育てることへの思いは、男性ではなく、女性ならではのことであり、いわゆる母性を示す尺度であるといえよう。

「9 子供との精神的距離」は「いつまでも子供と暮ら

したい」と「年を取ったら、子供や孫と暮らしたい」が中心項目であり、いつも子供を信じて相談相手として、心の支えでありたいと思い、子供にとって物理的にも精神的にも最も「身近に」いたいという願望を表している。

「10 子供への献身性」では、「子供のために自分が何をしてやれるか考えるのは楽しい」と「子供の友だちがわが家に遊びに来るとにぎやかになってうれしい」が中心で、自分自身のことよりも子供の身の回りの世話が楽しいことを表している。

「第IV因子」(社会進出)(2尺度)

「11 仕事追及」では、「家の空気より職場の空気の方が自分にあっているのではないかと思う」と「子供と一緒にいるより職場で仕事をしている方が生き生きしていると思う」が中心項目であり、自分自身の真の欲求は、主婦業や母親業をするよりも、仕事を持ち、キャリアとして活動していくことを望んでいる(あるいは望んでいた)ことを示すものであろう。

「12 自立志向性」は「自分をのばすチャンスがあれば積極的にのばす方だ」と「どんな環境にいる時でも、私は好奇心を失わない」が中心項目である。母親になったことで人間として成長することができ、子供が成長して一人前になっていくことをうれしと感じながら、同時に社会との接点を見つめている。ある時点での自己を社会(環境)の中で、客観的にとらえている。子供にも家事を分担させ、子供自身の問題は子供で解決していくべきととらえ、必要以上の接近はせずに、一個人としての人格を認め、ほど良く「子離れ」もできている。

2 これまでの研究との関連性と今後の課題

本研究において、統計量としてはほぼ信頼のおける、4因子12尺度からなる子供を持つ既婚女性の「母性・女性性測定尺度」を構築した。

個々の因子や尺度はこれまでの研究報告に矛盾するものではなく¹⁴、さらにはこれまで別個に焦点を当てて研究が行われてきた領域を概ね含む尺度であることが認め

られた。

今回構成された尺度の特徴は、子供を持つ既婚女性の妻として、母親として、そして職業人としての意識を客観的かつ包括的に把握するためのものである。換言すれば、特別な介入・支援を必要とする子供の主たる養育者である「母親」の女性の部分をも同時に把握しようとしたものである。

今回は、「包括的な尺度」を目指したため、女性の属性をすべて混みにして尺度構成を行っている。因子分析において、当初の項目を最大限利用することも勘案した。構成された4因子12尺度の測定尺度に対しては、対象者の属性、その中でも特に、年齢や学歴などで「意識の違い」すなわち「得点」が異なりうるものが十分に予測される。したがって、属性による分析を早急に行う必要がある。さらには、尺度間の得点のバランス(プロフィール)とその女性の精神状態(ストレスやうつ)の検討も必要となってくるだろう。

文 献

- 1 伊藤裕子(2000)心理学におけるジェンダーのパースペクティブ, “ジェンダーの発達心理学”, (伊藤裕子編), ミネルヴァ書房, 京都, p.1-12.
- 2 油井邦雄(1995)総論:女性性の概念とその実証的検討, “女性性の病理と変容”(油井邦雄編), 新興医学出版社, 東京, p.1-26.
- 3 柏木恵子, 永久ひさ子(2003)女性にとっての子供の価値:なぜ少子化か, “心理学とジェンダー”, (柏木恵子, 高橋恵子編), 有斐閣, 東京, p.17-23.
- 4 平山順子(2003)家族を「ケア」ということ:ケアの喜怒哀楽を左右するもの, “心理学とジェンダー”, (柏木恵子, 高橋恵子編), 有斐閣, 東京, p.24-30.
- 5 大日向正美(1988)“母性の研究”, 川島書店, 東京.